

2021年4月11日復活節第2主日説教

司祭バルナバ菅原裕治

旧約聖書 イザヤ 26 章 2-9 節、19 節
使徒書 使徒言行録 3 章 12a、13-15 節、17-26 節
福音書 ヨハネによる福音書 20 章 19-31 節

みなさまはじめまして、4月5日付で東京聖三一教会牧師となりました司祭バルナバ菅原裕治です。どうぞよろしくお願いいいたします。立派な会堂で、皆さまと御一緒に礼拝を奉げることが出来ずに残念ですが、本日もみ言葉から学びたいと思います。

本日の旧約日課はイザヤ書です。先週の復活日の聖書日課もイザヤ書であり、今週の箇所と内容的にも続いています。ただし、林永寅先生から、東京聖三一教会では聖餐式聖書日課に新しい「聖書協会共同訳」を用いるとお聞きしましたので、皆様のお手元に届いている聖書日課のファイルは、新しい「聖書協会共同訳」が掲載されています。本日の旧約日課は、新しい「聖書協会共同訳」と古い「新共同訳」とで訳文が変わったところがあります。訳が変わっても、大筋の内容的として、25章から26章、すなわち先週の内容と今週の内容が連続していることは変わりません。しかし、訳が異なることによって、少しニュアンスが変わるところもあります。最初にその点について注目したいと思います。

まず聖餐式聖書日課には記載されていない事柄ですが、現在の『聖書』には小見出しがあります。これは「新共同訳」から採用された、ひとつのパラグラフの内容を把握するのに便利な記載ですが、その部分が大きく変わっています。以前の「新共同訳」では、先週の箇所がある25章1節以下には、「神の驚くべき御業」、また今週の箇所26章7節以下には「復活を求める祈り」とありました。しかし、新しい「聖書協会共同訳」では、25章1節以下の小見出しは「横暴な国々への裁き」、26章7節以下では「正しき人の道とその祈り」となっています。どちらが原文に近い意味を伝えているかと申しますと、それは新しい「聖書協会共同訳」の方です。「新共同訳」が「驚くべき御業」とあえて記載したのは、主なる神様が、横暴な周囲の国々に裁きを行うことの意味が、「驚くべき御業」であるにとらえたからでしょう。新しい「聖書協会共同訳」は、意味というよりも内容そのものをそのまま記載したといえます。

その部分にある26章9節を見てみますと、「あなた（主なる神様）の裁きが地に行われるとき世界に住む人々は正しさを学ぶでしょう」（新共同訳）と「**あなた（主なる神様）の裁きが地上で行われるとき、世界に住む人々は義を学びます**」（聖書協会共同訳）とほぼ同じ訳であり、意味することはあまり変わりません。ただし、人々が学ぶ対象となっている「正しさ」が、新しい訳では「義」となっています。ここの原語は同じであり、聖書で「正しさ、正義、義」などに訳される言葉です。この箇所で大切な事柄は、主なる神様によって裁きが行われ、「正しさ、義」が示されるということです。

この「裁き」の対象には、もちろんイスラエルも含まれています。むしろ、イスラエルは、その裁きの模範とならなければならない存在です。ただし、模範には、主なる神様に忠実である姿を周囲に見せる良い見本となるという意味と、主なる神様から厳しい罰を下

される姿を見せる反面教師的な意味もあります。いうならば、イスラエルとは、主なる神様が裁きを行い、世界にその「正しさ、義」を示し、その「正しさ、義」を通して、世界中に平和が広がるための媒体、いうならば主なる神様が「驚くべき御業」行う、第一の働き「場」に他ならないのです。

さて、このあとに続く部分の「新共同訳」の小見出しは、「復活を求める祈り」となっていました。これは少し誤解を招いていたと思います。その19節を見ますと、「新共同訳」は「あなたの死者が命を得、わたしのしかばねが立ち上がりますように」、「聖書協会共同訳」では「あなたの死者は生き返り私の屍は立ち上がります」となっており、両方の訳でも、「復活」という言葉は用いられていません。「復活」という概念に結び付く原語は「(眠りから) 起きる」「(倒れた状態から) 立ち上がる」という身体的動作を意味する言葉です。この言葉の旧約聖書のギリシア語訳では、「新約聖書」でイエス様の復活に用いる言葉と同じ言葉が用いられます。しかし、当然のことではありますが、旧約聖書の神学として、またイザヤ書の意図として、ここでイエス様の十字架と復活と同じ概念を念頭に置いているわけではありません。イザヤ書自体は、単にあり得ない話として、死者が再び立ち上がること、つまり、単に死者が生き返ることを念頭に置いて語っており、それをたとえとして、正しい人の歩みが、どのようなことがあっても、途絶えることがないことを語っているのです。ただし、わたしたちの教会の信仰では、このイザヤ書の記述の延長線上にイエス様の復活があり、この箇所がそのことを示唆していると考えerことは間違いではありません。イザヤ書が書かれた時代、死者が再び生き返るというぐらい見ていた事柄が、それ以上の意味を持つ出来事として、イエス様の時に起こったと信じるからです。そして、それらすべてが、主なる神様の御心に他ならないと信じるからです。

さて、新旧の聖書の翻訳の違いについていろいろと述べましたが、この旧約日課で大切なことは変わりません。つまり、主なる神様が、イスラエル・ユダとその周辺諸国に対する「驚くべき御業」を行い、世界に「正義」が示されること、そして多くの人とその「正義」を学び、地上に「平和」がもたらされること、それら全体の出来事がイエス様の「復活」の希望によって裏付けられること、そのメッセージ自体は、翻訳が変わっても、また小見出しが変わっても、変わらないといえます。

ただし、次の部分については、もう少し深く注目する必要があると思います。それは26章7節です。この節は「聖書協会共同訳」では、「**正しき人の道は平坦であり、正しき人の道筋を、あなたはまっすぐにされます**」、「新共同訳」では、「**神に従う者の行く道は平らです。あなたは神に従う者の道をまっすぐにされる**」となっていました。「神に従う者」が「正しい人」となったのです。原文の意味に近いのは、新しい「正しい人」の方です。先ほどの「正しさ、義、正義」を意味する言葉と同じ語根の単語です。

ここは「新共同訳」全体のことに関わることになってしまっているのですが、「新共同訳」の「旧約聖書」において「正しい」とは「神に従う」という意味であり、それゆえ「正しい」という言葉の多くを「神に従う」と訳していました。「旧約聖書」において、神に従うことこそ「正しい」ことである、そのように定義することは間違いではありません。しかし、神に従うことにおいて、一つの基準があることを忘れてはならないのです。その基準とはも

ちろん「律法」です。ただ自分勝手に神に従うことが正しいことではなく、「律法」という主なる神様が与えた基準に即して歩むことが、正しいことに他ならないのです。

もちろん、そう考えますと、わたしたちの教会の信仰においては、疑問が残ります。「律法」は、天地創造の初めからあったわけではないからです。それゆえ、パウロが『聖書』（「旧約聖書」）に見出したように（ロマ書4書など）、「律法」以前の信仰者は、主なる神様に忠実な信仰を持っていたからこそ、「義」であった、すなわち「正しい」と認められたと考えます。また「律法」に基づいた神殿祭儀は、基本的にイスラエルにとっても、主なる神様にとっても喜びにほかならないのですが、主なる神様は、あまりに儀礼化した神殿祭儀と、そこでささげられる贈り物をも喜ばれない場合もあるのです（ホセア書8:13）。それゆえ、これら全部を概観して「旧約聖書」の「正しさ」とは、神に従うことであると結論づけることは間違いではありません。現在において、教会の信仰とは異なるかもしれませんが、古い契約に立ち、律法に忠実であろうとする歩みも間違いではありません。しかし、むしろそうであるがゆえに、新しい「聖書協会共同訳」のように「正しい人」は、そのままに訳すことの方が良いと思います。「正しさ」とは何かをより一層明確に問うことにつながるからです。

旧約聖書において、「正しい人」という概念を考慮に入れて、主なる神様の信じる人間の間にある大前提は、本日のイザヤ書にある通り、「**正しき人の道は平坦であり、正しき人の道筋を、あなたはまっすぐにされます**」ということです。それは、主なる神様を信じる人に、主なる神様は恵みと守りを与えられ、常にその人の歩む道は守られるということです。このような主なる神様との関係の中で歩んでいた、旧約聖書の登場人物は誰か言えば、それは「ヨブ記」のヨブに他ならないでしょう。しかし、「ヨブ記」で問われているように、「正しい人」が、地上の生活において悲しみや苦しみを経験することとなったとき、主なる神様との関係はどうなるのでしょうか。本当に「正しい人」ならば、そのようなことは起こらない、起こるはずもない。そう答えを出すこともできます。しかし、現実的には決してそうではありません。そして、「ヨブ記」だけではなく、多くの詩篇にはある嘆きの言葉は、「正しい人」の苦しみの言葉が主なる神様に向けられています。

逆に、主なる神様の目から見て、悪を行う人が、しっかりとこの地上で裁かれ、罰を与えられるならば、「正しい人」がどのような人であるかが、間接的に証明されたこととなります。しかし、現実的には、悪を行う人が、必ずしも裁かれない場合、罰を受けない場合もあります。

「正しい人」という言葉から、主なる神様と人間との関係について考えてきましたが、本当の意味で「正しい人」にとって、もっとも困ってしまうのは、「悪を行う人」の存在でもなく、その人が裁かれない状態でもなく、また自分が報われなくて苦しい状態であることでもないと思います。本来は正しくない人が、外見上も振る舞いにおいて「正しい人」のように装い、そのことが律法や神殿祭儀で裏付けられ、多くの人々もその人を「正しい人」と認めている状態であると思います。そんな複雑な条件の人が存在するのか？と思ってしまうのですが、イエス様を十字架にかけた人々は、そのような人々であったと思います。

本日は、使徒書の代わりに使徒言行録を読みます。本日の箇所は、ペトロがエルサレム

の神殿の境内でイスラエルの人々に説教をする箇所です。いろいろな意味で素朴なペトロがこのような立派な説教ができるのか？という疑問は取り上げないこととして、ここでは明らかに「旧約聖書」（使徒言行録が書かれた時代は単に『聖書』）にさかのぼり、イエス様に起こった出来事がなんであったかを整理して話しています。ここには、パウロの手紙にも「マルコによる福音書」にもない、整理されたいわば歴史化された言葉があります。そこでペトロは「**アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、私たちの先祖の神は、その僕イエスに栄光をお与えになりました。あなたがたはこのイエスを引き渡し、ピラトが釈放しようとしていたのに、その面前でこの方を拒みました。聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦すように要求したのです**」（使徒3：13-14）と語ります。イエス様の裁判や十字架刑に至る過程においては、なぞが多くあります。しかし、そこに「正しさ、義」が関わっていたことは確かです。つまり、「正しさ、義」のためにイエス様は十字架にかけられたのです。使徒言行録のペトロの言葉は、ここでバラバのことを「人殺し」と表現していますが、見方を変えれば、イスラエルの多くの敵を倒した人であるならば、「英雄」であり、「正しい人、神に忠義の人」だとみることもできます。

わたしたちの生活では、イエス様か？バラバか？のような選択の場面はないと思います。むしろ、わたしたちが気を付けなければならないことは、「主の祈り」で祈るように、悪に陥らないということかもしれません。しかし、気を付けなければならないことは、「正しさ、義」にも関係します。つまり、「正しさ、義」を追求するあまり、誰かを傷つけないことが大切なのです。

歴史において、大きな悲しみや悲劇は、一方的な正義によって起こってしまふことがあります。今、世界で起こっていることは、正義と正義のぶつかり合いであるともいえます。だからこそ、歴史上では、勝った方が正義であり、そのためには手段を択ばないという考え方もあります。しかし、主なる神様の「正しさ、義」はそうではありません。わたしたちの主イエスが信頼した「正しさ、義」も、そうではありません。イエス様は、ただ自分の「正しさ」を追求したのではなく、自分の行いが御心になつた正しさであるようにと祈りつつ、十字架の道を歩みました。イエス様のその歩みは、人間の理解・感覚では、十字架につけられてただ死ぬだけという敗北でした。しかし、その死は勝利を意味しました。復活という希望を世界に示したからです。

福音書の物語において、「**弟子たちは、ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸にはみな鍵をかけていた**」（ヨハネ20：19a）とあります。なぜ恐れたのか、それは本来間違いでしかない人間の思いが、すべての条件を整えて、主なる神様の「正しさ、義」であるかのように自分たちにも迫ってくると思ったからです。しかし、イエス様は、そのような弟子の「**真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた**」（ヨハネ20：19b）のです。そして、「**そう言って、手と脇腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ**」と物語は続くのです。

イエス様の復活の出来事は、すべての恐れを取り除いてくれます。わたしたちはその復活の主イエスを信じ、復活の主イエスを通して招かれて集まる者です。そのイエス様の出来事が本当であることを証しすることが、わたしたちの務めです。わたしたちを通して、

主なる神様の「正しさ、義」が示されように、これからも教会の歩みを続けていきたいと
思います。